「底が突き抜けた」時代の歩き方 491

「仕方ない」成熟社会に風穴を開けよ！ ―映画『ベルリン、僕らの革命』

現役の３４歳の市役所職員が描いた『となり町戦争』（三崎亜紀）は９・１１以降、アフガン空爆、イラク侵攻、自衛隊派遣……といったように、ずるずると「仕方ない」ムードが加速する現実の空気のなかで、戦時下のあまりもの「現実感のなさ」を捉えようとしている。町の広報誌でとなり町との開戦を知った主人公はある日、実感もなく訳もわからないまま、町内から偵察員に任命される。銃弾が飛び交うこともなく、戦争による死傷者も全く目撃しないのに、広報誌を手にする度に死者数は増え続けている。役場の説明会で若者が執拗になぜ戦争になったのかを問うと、別の住人が「戦争は始まっとるんだから、今さらそんなこともちだしてどうする」という。疑問を持ちながら任務を続ける主人公は、《「『現にここにある戦争』を、僕たちは否定することができるのであろうか？」と自問し、「わからない」と呟く。》

となり町との戦争が起こっていることも、その戦争による死者が出ていることも広報誌で伝えられるだけで、本当のところは皆目わからない。ただ確実なのは主人公が町から偵察員に任命され、戦争を担当する業務の係の女性市職員と夫婦を偽装した偵察活動を行うために、となり町に借りた部屋で数ヶ月同居したことだけである。その他のことは全くわからない。戦争終了後、女性市職員から説明会で戦争について質問していた若者が彼女の弟で、その弟が今回の戦争で死んだと聞かされても、主人公には霧の中の戦死者に対して哀悼の気持ちすら素直に湧き上がってこない。戦争があったらしいこと、戦死者が相当数出たらしいこと、そして戦争が終わったらしいこと、しかし主人公にはなんの実感もなく、すべてフィクションであったとか、主人公の夢の中の出来事、と後でいわれたとしても、ひとつも反論できない状態に置かれたままである。

要するに、自分が知っていても知らなくても、なんの変哲もないようにして戦争は身近であろうが、遠くであろうが、起こり、いつのまにかまだ続いていたり、終わったりしているということなのだ。そんな戦争の死者が「あなた」であっても、驚くのは「あなた」だけであり、他の人はなんにも知らない、という貧寒とした光景がこの小説から浮かび上がってくる。いくら異を唱えても大勢（たいせい）はどこ吹く風で流れていくから、異を唱える声はしだいに小さくなり、やがてその声が人々の中から消えていくことによって、「仕方ない」ムードが蔓延してくるのだろう。それはもちろん、諦めムードである。諦めなければ腹が立つことばかりであり、だからといって腹を立ててばかりいてもなんの進展もないから、「仕方

ない」で済ませるしかないではないか、ほかにどうしろというのか、とムッとする人も中にはいるだろうが、よく考えれば、今の若者は「仕方ない」ムードのなかで小さい頃から育ってきているのだ。
「仕方ない」ムードは若者たちに「変わらない自分」を植え付け、「確固たる自信のなさ」を不動にした。東京学芸大教授の山田昌弘は「希望格差社会とやる気の喪失」(『中央公論』０５．４）で、若者たちの「確固たる自信のなさ」は、学校教育時代での「絶望」の積み重ねに由来していることを次のように示唆する。
「希望は努力が報われると感じるときに生じ、努力が報われないと感じれば絶望が生じる」（ランドルフ・ネッセ）というフレーズは、教育の世界に最も当てはまるという。
《学力低下という現象は、「教育という領域で勉強という努力が報われない」という状況が広がったから起きた現象ではないのか。勉強してもしなくても将来が変わらないと思えば、勉強に身が入らないだろう。そして、勉強努力が報われないという状況は、一方で、実際に苦労して勉強してもその努力が無駄になり絶望感に襲われる若者も生み出しているのだ。》
　数年前、ある大学生がマスコミに就職希望の進路相談に来たエピソードを紹介する。「新聞を毎日丹念に読み、就職試験問題集をやって、文章を書く練習を続けてみたら。書いたモノを添削してあげてもいいよ」とアドバイスすると、「そうすれば、絶対受かるという保証はありますか」と返ってきたので、《今のこの時世、マスコミ各社の入社試験の倍率はたいへん高く、だれも保証はできないと答えたら、「じゃ、やめます」と言って、一般企業就職に切り替えた。》
　戦後日本の、１９９０年頃までの学校教育は、《あらゆる生徒にとって、「勉強という努力が必ず報われる」という勉強努力保証システム》を構築してきたとして、以下の機能性を列記する。
《①能力に合った職に送り出す機能を果たし、生徒に将来の見通しと安心を与えた。つまり、これくらいの学力があればこれくらいの学校を出て、これくらいの職に就ける（女性は、これくらいの人と出会え、これくらいの生活ができる）という期待ができた。
　②過大な期待を諦めさせる機能を果たした。特定のパイプラインに乗れなければ、特定の職に就くことを諦めるしかなく、パイプを流れる過程で、徐々に諦めがついた（いくら医者になりたくても、医学部に入る学力がなければ諦めるしかない)。
　③階層上昇の機能（世代内上昇＋世代間上昇）を果たした。少しでも頑張って勉強すれば、上の学校に行けて、よりよい生活が送れるという期待がもてた。そして、親よりもよい学校に行けば、父親以上の職に就ける（女性の場合は、そのような相手と結婚できる）という期待が持てた。》
　だが、９０年代後半、経済社会構造の大転換が起こり、《物を作って売るという工業が主要な産業であった時代から、情報やサービス、知識、文化などを売ることが経済の主流に

なる時代への変化》が職業世界の不安定化を促し、旧来型の時代に適応した従来の学校教育システムの危機を招来した。《ニューエコノミーでは、物作り主体のオールドエコノミーとは違って、商品やシステムのコピーが容易である。そこで生じるのが、コピーのもとを作る人と、コピーをする人＋コピーを配る人への分化、マニュアルを作る人とマニュアル通りに働く人への分化》であり、《将来が約束された中核的、専門的労働者と熟練が不要な使い捨て単純労働者へ、職業を分化させる。そして、グローバル化による競争激化や金融危機がその傾向を加速させる。そして、その影響はまず、若者を直撃する。》
《企業は、若者を選別して、能力のあるものは中核社員、専門的社員として優遇、それ以外は、派遣、アルバイトなど保障のない労働者で置き換えようとする。その結果、非正規雇用者が大量発生する。それが、日本では、フリーターの増大として表れるのだ。
一方で、旧来型の産業・職は、徐々に衰退局面に入る。工場はアジアに移転し、メーカーは工員を大量に採用しなくなる。ＩＴ化は、営業や事務、販売職の（熟練を前提とした）正社員を不要にする。》
この産業・職業世界の激変に日本の学校教育システムは即応できずに、《工業高校を出ても正社員工員になれない人、女子短大を出ても企業一般職になれない人、文系大学を出ても上場企業ホワイトカラーになれない人、そして、大学院で博士号をとっても、大学専任教員になれない人が溢れ出す。それが、さまざまなレベルでのフリーターの出現となって表れる。彼らは、学校が想定する職に就くという「ささやかな夢」さえも叶えられなくなっている。》では、大学に行く値打ちがなくなったからといって、誰もが大学を目指さなくなるかといえば、けっしてそうではない。《大卒だからといってホワイトカラーになれないということは、大学に行かなくてもいいことを意味しない。大学に行かなければホワイトカラーになることはもっと難しいということである。これは学校教育のリスク化と二極化が起きたと言ってよいだろう。》
学校歴はそれに見合った職業を保証しないというリスク化に見舞われると同時に、《学校歴に見合った職に就けた人と就けない人の格差》の拡大という二極化に見舞われていく。
二極化は、大学院博士課程修了者における専任教師と大学非常勤講師との待遇の格差をはじめ、公務員保育士とパート保育士、正規公務員司書と非常勤司書、正社員と派遣社員など、さまざまな職種で生じており、学校歴や仕事能力に違いはなくても、学校システムの《パイプを流れ続けられたか、そこから漏れて正規の職に就けなかったかの違いで、処遇、そして、将来の見通しに大差がつくという状況が生まれて》くる。《その結果、勉強をして学校に入って努力して卒業しても、その努力が現実に無駄になっている学卒者が増える。その状況を体感して対極に生じるのが、勉強に努力しても仕方がないと思う生徒、学生であり、それが学力低下として表れるのだ。》
もちろん、学力低下は従来の学校システムの機能不全の結果にほかならない。その理由

として以下の三点が列記される。
《①学校で教育されることが、学校に見合った職に就ける保証ではなくなる。生徒、学生は、その職に就けるかどうか、「不安」の中で学ぶことになる。
②次に、過大な期待をあきらめる機会がなくなる。とりあえず、学校への入学は容易になるからだ。大学の数だけは増え、大学院拡充政策のおかげで修士・博士課程への進学も容易になる。音楽学校、声優学校、ネイルアーティスト学校、アナウンサー養成校など、「格好いい」職に就くための専門学校も乱立状態である。日本では、基本的に親が高等教育の費用を出すので、とりあえず、入学することができる。入学し、運がよければ、その学校が想定する職に就くことができる可能性はある。とりあえず、パイプには入れるので、自分の実力に見合わない過大な期待が広がる。
③そして、教育による階層上昇の期待が失われる。学歴インフレが起こっているので、親以上の学校に行っても、親以上の職に就けないケースのほうが多くなっている。》
要するに、《努力しても報われるとは限らない。学校には入れるが運がなければ希望の職に就けないかもしれない。勉強しても親以上の生活ができるとは限らない。つまり、学校教育システムは、生徒にとって希望のシステムではなくなった》ということである。学校教育システムの機能不全の中で、《学校を出ても仕方がないが、学校を出なければもっとダメ。学校に入った全員が、希望の職に就けるわけではない》から、必然的に《勝ち残ったもの以外は死ねという》バトル・ロワイヤル状況が起こってくる。そもそもパイが少なくなっているのに、そのパイにありつくための教育を大量の生徒、学生に行っているという悲惨な状況は当然ながら、生徒、学生、若者の社会意識にさまざまな悪影響を及ぼす。その最大なものは、《生徒・学生の希望、連帯、尊厳を破壊する》ことだ。
《橘木俊詔京都大学教授が、『封印される不平等』（東洋経済新報社）の中で、勝ち組は「自分の力で手に入れた」と思いこみ、負け組は「運が悪かっただけだ」と思いたいという心理を指摘している。社会に出れば、勝ち組と負け組は別のところにいるケースが多いが、教育の現場だと、将来の勝ち組と負け組が同じ学校で学んでいる可能性が高いのだ。
教育勝ち組（期待通りの職に就くことができ、当該の学校に行くという努力が報われた人）は、「敗者は自己責任」と無関心にならざるをえない。逆に、教育負け組（学校に入っても、期待する職に就けなかった人）は、努力が無駄になると絶望を感じ、かつ、努力が無駄になった責任を自分で負わなければならない。
生徒、学生は、努力が無駄になり、尊厳と希望を失う可能性に常に不安を感じることになる。これは、生徒、学生の連帯を破壊する。近年、研究者志望の大学院生の間で、アドバイスどころか、お互いの欠点を指摘するということも行われなくなってきたという。欠点を指摘することは、相手の論文を向上させるヒントを与えることになる。》
バトル・ロワイヤル状況において、足の引っ張り合いが行われているのである。このエ

ネルギーの無駄はもちろん、学校を出ても期待する職に半分も就けないという「教育の無駄使遣い」に起因しており、その状況を前にすれば、「勉強しても無駄」が大学を目指す高校生、中学生の「勉強する意欲」を喪失させていくことになるのは当然であろう。「教育のドミノ崩壊」によって、《希望の二極化が、やる気の二極化をもたらし、その結果、学力は二極化》していくが、《今生じている教育問題は、教育と職業という領域の「継ぎ目」で生じている問題》だから、その「継ぎ目」への適切な対策抜きに《教育内容の改善とか、教え方の工夫だけで、学力低下問題が解決できるはずがない》という結論が導き出される。
『若者と仕事―「学校経由の就職」を超えて』（本田由紀著）でも、高度経済成長期に一般化した「学校経由の就職」が機能しなくなった点が取り上げられている。就職における需要と供給がうまくマッチしていたのが、企業が若者の採用を抑制するようになったとき、「学校経由の就職」は若者の期待に応えられなくなった。そこでの、「マクロ次元の経済状況」はどのようなものであったかといえば、第一にバブル崩壊後の長期不況による労働需要の減退、第二に５０代後半の団塊の世代と３０歳前後の団塊ジュニア世代の、労働力人口の中での大きな膨らみによる新規採用の停滞、第三に経済のサービス化によるパートやアルバイトなどの非正規社員の増加、正社員化の減少、第四にかつては退職して家庭に入っていた２０代後半の女性たちの労働力市場への進出、などが挙げられる。
「成熟社会の教育再構築」を０５．２．２０付神戸で主張するのは、宮台真司である。《中世まで子どもは通過儀礼を経れば大人になれましたが、近代社会は複雑な分業体系で、人材を適材適所に張り付ける必要があります。そこで選別と動機づけを担うのが近代の学校教育》だが、成熟社会では「仕事での自己実現こそが幸せだ」という思い込みが根強く存在している。しかしながら、《成熟社会ではマニュアルに従えば誰でも役割をこなせるサービス業が増えます。学力が低くても社会常識があれば足ります。仕事は糧と割り切り、趣味や消費での自己実現を図る生き方が評価されていい。世の中は創意工夫を要する高度な仕事ばかりじゃない。仕事での自己実現やそのための学力を迫る教育は、大量の失意と落胆を生みます。／創意工夫の必要な仕事には競争を通じた選別と動機づけが不可欠で、学力が問われるのはそうした仕事に就く人材です。万人に学力が必要との発想は時代遅れで、希少なポストをめぐる学力競争から降りるのも大切です。仕事だけが人生じゃないから腐らなくてもいい。かなわない相手と張り合うのはやめ、リスペクト（尊敬）すべきです。》
　成熟社会では「創意工夫の必要な仕事」と「マニュアルに従う仕事」の分化が不可避であり、前者には高度な学力が必要になってくるが、後者は《学力が低くても社会常識があれば足り》る、と指摘する。ただ、この「教育による序列化」を肯定するための条件として、次の条件が現実のものとならねばならない。
《まず、失敗してもハンディを負わずにやり直せること。特に親がかつて失敗したからといって、子どもを不利にしないことが重要である。第２に、敗者が食うに困ったり尊厳を奪

われてはいけない。敗者が腐らずにいられる仕組みが治安上も重要です。第３に、競争の多元性。学力一般という発想でなく、分野ごとに別の序列が必要です。》

この条件によって、「幸せ」の範囲が拡大されねばならないことを説く。《創意工夫の必要な仕事に就かない子どもの学力を底上げ》することよりも、子どもが《楽しい人生を送る能力》を磨くことのほうが重要であるということだ。このようにみていくと、《問題は、ちまたで嘆かれる子ども一般の学力低下ではなく、創意工夫が要求される仕事につく者の学力低下、つまりエリート教育の失敗です。役割とマニュアルに安んじることが許されない、政財界のイノベーション（革新）を担う人材の不足》にあることがわかる。「創意工夫の必要な仕事」につく者の学力低下によって「創意工夫」が意欲的になされずに、役割と「マニュアルに従う仕事」に堕し、エリート教育が言葉の真の意味におけるエリート輩出に失敗している。なぜ、こんな事態になってしまったのか。「創意工夫の必要な仕事」につく者に要求される世界認識と情熱が、戦後日本の学校教育そのものから消えてしまったからだ。

《いわゆる「体温の高い」人間が少なくなったことが背景にあります。９・１１（米中枢同時テロ）の後、議論を私に持ち掛けて来たのは帰国学生ばかり。生粋の日本人には生活保守主義が目立ち、人類の将来といった等身大を超えた領域に関心を持つ若者があまりにも少ない。教育の故障がそこにあります。》

学力が真に必要とされるのは、《人類の将来といった等身大を超えた領域》に踏み込むためであって、そのことへの関心の深まりのなかからエリート教育が生まれてこなければならない。《役割とマニュアルに安んじる》だけのエリートしか輩出しなくなっているのは、日本の学校教育現場もまた、「生活保守主義」に覆い尽くされているからだ。たとえば、いくら細分化され閉塞化した学習のあり方を転倒する試みとして総合学習が導入されようとも、「創意工夫の必要な仕事」をこなせるエリート教師が育っていない以上、どんな試みも挫折するほかない。《総合学習の機能が大切ですが、それを担える教師が不足する以上、文科省による一時的な店じまいも仕方ないでしょう。／日本は他の先進国に比べ、計算能力も識字率も生活態度も優れた労働者が多い。昨今の「学力低下論」は的外れです。》

宮台真司はこう締め括るが、総合学習の見直しの問題点は、総合学習を計画したとき、それを担える教師を育ててこなかっただけではなく、そのような教師を生みだす学校現場そのものが生活保守主義によって体温が低くなっていることを、文科省が見通せなかった点にある筈だ。「体温の低い」教師の増加を文科省は望んでおきながら、「体温の高さ」が要求される総合学習を実施しても、失敗は導入の当初から目に見えていた。また先の山田教授が、《学校を出たら期待できる職に全員どころか、半分も就けないという状況》について、「教育の無駄遣い」が行われていると指摘していたことにかかわっていえば、「教育の無駄遣い」は宮台説では、「マニュアルに従う仕事」に就く子どもの学力の底上げに躍起となること自体であり、そしてその子どもの将来への不安を高めることそのものであるといえよう。

ところで、学校歴に見合った就職とか「学校経由の就職」といういいかたで、あたかも学校教育＝就職的な見方が示されてきたが、勉強することは就職のためだけなのであろうか。「希望は努力が報われると感じるときに生じ、努力が報われないと感じれば絶望が生じる」という社会心理学者の言葉は、勉強の努力が就職によって報われるかどうかという問題に収斂していくものなのだろうか。もちろん、勉学に励むことによって希望の大学に行き、希望の仕事に就くことは学校教育の主要な目的にちがいないが、しかし、勉強することは必ずしも就職と関連づけられずに、人間としての成長に深く関与する営みとしても考えられてきた筈だ。勉強することによって考えることを覚え、多面的な物の見方を養い、経済や経営のために役立つかどうかだけで人間が評価されることのない場所を構築してきた筈である。いや、そう信じられてきたのではなかったか。

大学では哲学科がすでになくなっているらしいが、経営に限らず、あらゆる分野での営為の根底に哲学がなければ、行っていることの意味や目標を見失ってしまうだろう。「創意工夫の必要な仕事」に就く人材の育成に日本の学校教育が失敗している、と宮台真司が指摘するのも、勉強して学力を身に着けることが希望の仕事に従事しやすく、企業内で有利なポジションを手に入れて階層を上り詰めていく、といった上昇志向のためであるよりも、生活保守主義の枠組みに収まらない、《人類の将来といった等身大を超えた領域》への関心を喚び起こし、深化させていくためでもあることを示唆していたのではなかったか。ニートやひきこもりの若者が発している、「何のために勉強するのか」「何のために働くのか」という自問を本質的に追求すれば、知にかかわるあらゆる行為が自己を超えた水準をどのように展開していくか、という問いへとつながっていくのは避けられない。

そうでなければ、勉強したり考えることに一体、どんな意味があるというのだろう。教育が勝ち組を生み出すためのものでしかないなら、ニートやひきこもりを含む負け組は教育からも見捨てられていく存在になるだろう。本当は教育こそ負け組にとって、最大の武器ではなかったのか。ひきこもっている場合ではないのである。「何のために勉強するのか」「何のために働くのか」という自問は、負け組にとってのバリケードとして展開しうるときにのみ有効なのであって、その自問の手前で自分の進路が遮断されてしまうなら、自滅行為にしかすぎない。つまらない成熟社会に風穴を開けるまでは、俺たちはどんなことがあろうとも絶対に自滅はしない、と高らかに宣言しているのは、ハンス・ワインガルトナー監督のドイツ映画『ベルリン、僕らの革命』である。

三人の若者、ヤン（ダニエル・ブリュール）、ピーター（スタイプ・エルツェッグ）、ユール（ジュリア・ジェンチ）は、「教育者」（エデュケーターズ、この映画の原題）と自称して、彼らの革命を決行している。それは留守中の大金持ちの屋敷に侵入して、家具をオブジェのように積み上げ、彫刻は天井から首を吊るし、ステレオは冷蔵庫の中に家族の写真と共に放り込まれ、兵隊人形たちは便器に突っ込まれているという具合で、メッセージとし

て「ぜいたくは終わりだ」と書かれた封筒を置いて立ち去る。そのような行動によって金持ちを嘲笑するけれども、自分たちは泥棒ではないから、「盗まない、荒らさない」を信条として、次々と金持ちの邸宅に侵入する。バルセロナに旅行したピーターが見つけた新聞記事によると、《ベルリンで留守宅を狙う侵入者が暗躍。空き巣同様に家には入るが物は盗まない。家具や調度品を動かしメモを残して去る。署名は決まって『エデュケーターズ』。有力な手がかりがなく捜査は難航している。》

彼らの行動を支える論理は、同僚をかばって一緒にレストランをクビになったユールと、ブルジョワの論理によって成り立っているこの社会の不合理と欺瞞に反逆しようとするヤンの次の会話から読み取れる。

ヤン「彼をかばったのは立派だ」

ユール「でも大切な仕事を失ったわ」

ヤン「いいじゃないか。搾取工場反対の活動をしてるのに、自分は金持ち連中の奴隷だった」

ユール「ほんと。活動なんて、まるでムダだわ」

ヤン「反逆の難しい時代さ。昔はクスリと長髪だけで体制からはみ出せた。今は反体制とみられたものが商品になってる。ゲバラのＴシャツに無政府主義（アナーキー）のステッカー」

ユール「だから学生運動も起こらないのよ。すべてやり尽くされたと思われてる。昔、失敗したことが、なぜ今、成功するかと」

ヤン「革命には格言がある。“たとえ失敗しても最上の思想を残すこと”。個人にも言えることだ。何かに失敗しても自分の中に残ったものが自分を強くする」

ユール「今、この街で何人が革命のことを考えてる？」

ヤン「誰もいやしないさ。１０時４５分はテレビの時間だ。欧州人は１日４時間、テレビを見てるそうだ。革命を考えるヒマはない」

ヤンの言葉―「何かに失敗しても自分の中に残ったものが自分を強くする」―のなかに、たとえ「失敗しても自分の中に残ったもの」を大切にする、という視座が貫かれているのが重要だと思われる。この言葉は、自分たちの「革命」が失敗するかもしれないことを予見している点で、そして失敗しようとなにしようと、なにかが「自分の中に残っていく」行動を自分たちのなかに受け止めようとしているからだ。この考えからは「エデュケーターズ」として侵入した金持ちの家で行われているさまざまなアート的な試みを、金持ちを驚かせる以上に、「自分の中に残っていく」試みとして行われているのが感じられる。「エデュケーターズ」に加わる前のユールからその行為の持つ意味を訊かれて、ヤンはこう答える。

ヤン「ぬくぬくと暮らす奴らへの警鐘さ。他人に入られて気味悪いし、監視されてると思うと不安でたまらない」

ユール「家の中の物を貧しい人に配れば？」

ヤン「泥棒で終わらず恐怖を与えたい。銀行で並んでる間、耳元にささやきが。“ぜいたく

だ、金がありすぎる ”。孤立感を味わう。何も助けにはならない。金も伴侶も警察も」
　映画パンフには、明治大学教授瀬川祐司による「『ベルリン、僕らの革命』の社会的背景」が説明されている。
《１９６０年代後半、世界の多くの地域と同じく、ドイツでも大規模な<学生による反乱>が起こった。大学は封鎖されて通常の授業はほとんど不可能になり、自主ゼミや討論集会のみがおこなわれた。学生たちはコミューンに暮らし、毎日のようにデモ行進をおこなった。それまで当然と考えられていたすべてのことを疑ってかかることをモットーとする彼らにとって、新しい<常識>となったのは、男性の長髪、ドラッグ、フリーセックスである。６０年代後半とは、ヴィエトナム戦争が泥沼化し、中国の文化大革命や<プラハの春>事件が起こった激動の時代にほかならない。<アメリカ帝国主義>を批判し、左翼思想を信奉するドイツの若者たちが英雄視したのは、毛沢東やチェ・ゲバラであった。
　しかし、<反乱>の規模が拡大するにつれて、鎮圧しようとする国家からの力も強まる。一部のリーダーは、さらに過激な暴力的闘争に向かおうと訴えたが、大半の若者はそれについていけずに離反し、<運動>は急速に衰えてしまう。そして、過激な主張を掲げる者たちは地下に潜り、７０年代後半には<検事総長殺害事件><ジュライヤー誘拐殺害事件>、モガディシオのハイジャック事件などを起こすことになる。（中略）
　この<反乱>のピークは６８年であったため、ドイツではそれに参加した世代を<６８年の人々>と呼ぶ。中核をなすのは１９４５年から５０年ごろまでに生まれた人々なので、彼らは現在５５歳から６０歳ぐらいになっている。ヴェンダース、ファスビンダー、ヘルツォークといった<ニュー・ジャーマン・シネマ>の担い手たちも、まさにこの時代の申し子である。
もちろん、映画にかぎらず、現在のドイツ文化シーンにおいて<６８年の人々>は大きな存在感を発揮している。政治の世界でも、<６８年>のメンバーを中心として成長した「緑の党」がいまや政権与党となっているし、大学や研究の世界、あるいは法曹界でも、現在彼らは疑いなくドイツを動かす位置にあるといってよいだろう。（中略）
　その後のドイツでは、１９６８年のような闘争はほとんど見られなくなっている。目立ったものとしては、７０年代後半から８５年ごろにかけて、ベルリンの若者たちが取り壊しの決まった住宅を不法占拠して住み着き、芸術的・文化的にも多くの成果を生みだした活動が挙げられる程度である。ちなみに、この<住宅占拠>の運動は、９０年代なかばにも<壁>が開いたあとの東ベルリンで小規模におこなわれたことがあり、『ベルリン、僕らの革命』の監督、ワインガルトナーもその一員であった。（約３０人でひとつの建物を占拠し、最後は５００人の警官隊に排除された）という事実は、この映画を理解する上できわめて重要なものに思われる。現在のドイツでは失業率も高く、年金制度や保険制度も国民にとって不利な方向へ改正され、若者たちの将来への不安は明らかに高まっている。しかし、

この映画でも話題になっている反=グローバル化や動物愛護に関する署名活動をおこなう人々ならよく見かけるが、多くの若者にとっては、何が自分たちの真の問題なのかさえわからないようだ。そんな不満をたくみに吸い上げているのが、<外国人排斥>を最大の主張として掲げる極右勢力であり、特に旧東独地域において彼らが著しく力を伸ばしていることこそが現在のドイツが抱える最大の社会問題かもしれない。》

ドイツ映画ではこの数年、「ＲＡＦ（ドイツ赤軍）とは何だったのか」をテーマにする作品が多く、ＲＡＦによるドイツ銀行頭取殺害事件を扱った『Blackbox　BRD』、東独に匿われていた過激派の運命を描く『Die　Stille　nach　dem　Schuss』、最も有名なＲＡＦリーダーの生涯を振り返る『Baader』、２０年も逃亡生活を続ける元過激派夫妻の悲哀をクールに描いた『Die　innere　Sicherheit』などが挙げられ、《いずれもテロリズムを美化するのではなく、むしろ、<テロリストの哀れな末路>に焦点を当て、距離を置いてドイツ史の重要なひとつの局面の真相をさぐろうとする誠実な試みであったように思う。とりあえず<政治参加>の意識を抱く若者の映画を撮りたかったというワインガルトナーによる『ベルリン、僕らの革命』が現在という時期に製作されたという事実も、そういった土壌の上に立つものと考えられるだろう。２００４年末のベルリンでは、まさしく<芸術を再=政治化することは可能か？>という大規模なシンポジウムがおこなわれており、若い作家・芸術家のなかに<アンガージュマン>を意識する傾向が確実に存在していることも、つけ加えておきたい。》

さて映画は、ピーターの旅行中に彼の恋人のユールとヤンが親密になったことと、ユールが交通事故によって多額の賠償金の支払いに苦しめられている相手の豪邸に忍び込んで、やむなく会社重役のハーデンベルクを誘拐せざるをえなくなる事態が起こったことによって、物語は一気に「革命の難問」にむかって突き進む。ベルリンから遠く離れた山荘で、３人の若者と人質になった５０過ぎの男との奇妙な同居生活が始まる。「６０年代の昂揚」を闘士として担ったハーデンベルクは、３人のやり方を批判する。「意味ないぞ、少数を教育しても」というと、ヤンは『“教育は少数から”だ。噂を聞いてマネする奴が出てくる。僕らは導火線さ」と返す。「英雄気取りか。単なるテロリストだ。世の中を不安に陥れてるだけだ。」とハーデンベルクが更に批判すると、ヤンは「英雄なんか目指してない。ほかの革命家とは違う。独創的だ。イカれてる。相手のダメージを最小限に留めるなんて。感謝してくれ。家に入るなんて、あんたらの暴力に比べたら！　しかも国に守られてる。僕らは自衛しかない」と切り返す。

ハーデンベルクによって生活苦を強いられているユールもまた、大金持ちの彼にむかって問い糺(ただ)す。「お金をどうするの？　何でもある。ぜいたくな物ばかり。高級車に豪邸にヨット。“群れのボス”を誇示するためよ。ヨットに乗る暇もない。なぜ、ぜいたくするの？」→「民主主義である以上、何を買おうと勝手だ。金は払ってる」→ヤン「違う。資本主義独裁国家だ。あんたは泥棒だ」→「私は働いて得た金で物を買ってる。正しい判断をして

るまでだ。それに、そうできるのは私だけじゃない。チャンスは皆にある」→ユール「東南アジアでは１４時間働いてるけど月収は３０ユーロ。豪邸も持てない。たとえ正しい判断をしてもバス代すら出せないわ」→「私は東南アジア人じゃない」……といったやり取りが続くなかで、ハーデンベルクは「世界は進化すべきだ」が「体制は変わらない」。なぜなら、「人より優位に立ちたいと願うのが人間だからだ。どんなグループでもすぐリーダーが現れる。それに、人間は物を買うと幸せな気分になる」と“体制の論理”を代弁する。

そんな彼にヤンが激しく、「一度、車を降りて街の中を見てみろよ。皆が幸せそうか脅えているか。居間をのぞいてみろ。皆、テレビにベッタリだ。幸せだった昔を懐かしんで。魂の抜け殻さ。街はどうだ？　まるでゴミためだ。混雑して。デパートでは人がロボットみたいに右往左往。殺伐として。彼らが手を伸ばした幸せを奪ったのはあんたらだ。分かってるはずだ。だが教えてやる。体制は熱しすぎた。あんたらの時代もじき終わる。大衆の怒りはじわじわ高まってる。貧民街の子らは米国のアクション映画に影響を受けてる。精神病も増えてる。連続殺人に異常犯罪、凶悪な暴力……もう抑制は効かない。抗うつ剤の効果も問題さ。体制にはうんざりだ」と突っ込む。体制の肯定面と否定面にそれぞれ依拠したこのやりとりは、もちろんどこまで行っても平行状態であり、不毛にみえる。

一見、この不毛で全く噛み合わないやりとりが、些か深刻で内省的な様相を呈してくるのは、ハーデンベルクが＜６８年＞の活動家という点にあった。翌日になると、彼は「君らの行為は間違ってるが、理屈を聞いてると昔を思い出すよ」と、３人に歩み寄りはじめたかのようにみえるが、けっしてそうではない。３人の主張から３０数年前の自分が否応なしに想い起こされたのである。３人が自分を問い詰める論理は、まさしくかつての自分の活動を支えた論理にほかならなかったからだ。「私らは歴史を作った。１９６８年は熱い時代だ。（笑って）私ももっとスマートだった。パーマの長髪に革ジャンにベルボトムのジーンズに帽子。まさに反逆児だ」「学生運動で社会主義学生同盟の幹部だった。Ｒ・ドゥチュケとも親友だ」「あまりにも昔のことで忘れてたんだ。３０年前に私もブルジョワを誘拐しようとした。それがどうだ。私が誘拐された。皮肉だ。取り入る気はない。君らは間違ってる。だが、君らの理想には敬意を払う」と、口にする。

ハーデンベルクは３人に対してではなく、かっての自分に対して向き合うことを迫られつつも、現在の自分を肯定する立場から「君らは間違ってる」という一方で、かつての自分を全面否定したくない思いから「君らの理想には敬意を払う」と述懐する。洗濯している彼を見ていたヤンは彼の曖昧さを撃つように、「なぜ学生運動の闘士がそうなった？　理想はどこへ？」と問い、「父は言った。“３０歳を過ぎても闘ってる奴は脳ミソがない”」と返す彼に、「その通りさ。でもそんなのは信じない。寝返り組の言い訳だ」と迫ると、ハーデンベルクは「変化は知らないうちに来る。ある日突然、古い車を捨てて快適な車が欲しくなる。結婚して家庭を築きマイホームを買う。子供にいい教育をと願えば金が要る。借

金をする。返済するために働く。人並みの暮らしをと。そして驚いたことに選挙では保守派に投票する」と告白する。

ハーデンベルクにとって３人は、かつての自分の生き方をまざまざと彷彿(ほうふつ)させる存在として目の前に現れていたが、３人にとっても彼は、理想もなにもかも打ち捨てて生活保守主義に囚われていく、３０数年後の自分たちの姿を予見するように目の前に現れていたのである。ハーデンベルクがかつての自分の生き様から内省を迫られていたなら、３人もまた、充分予測される３０数年後の（もう一人の）自分たちからの内省を迫られていたといえる。山荘の外での夕食時にハーデンベルクは、今はコックを雇っているが、「以前は私もよく料理した。妻やコミューンの皆のために」と話し、６人のコミューンで「単なる政治的なグループを超えて楽しんでた。自由恋愛だ。君たちもね」と口にするのに注意を払っていたピーターは、彼からヤンとユールの関係を聞き出す。

その時、「私は思ってた。人は金で自由になれると。実際は逆だ。責任に縛られて囚人のようだ」とこぼすハーデンベルクに、ピーターは飢餓から人を救うために寄付しろ、というと、「そうしよう、１回だけな。正直言って、財産を手放そうかと思う。すべて売って田舎に越すんだ。夫婦でつましい暮らし。教師にでもなって。学生の頃に戻るんだ。貧しいが幸せで恋してたあの頃に」と、内省的な姿勢をみせる。だが３人の関係は、ピーターがヤンを殴って山荘を出て行き、ヒビが入る。交通事故の補償金の打ち切りの念書をユールに渡し、今回の誘拐の件は絶対に警察に通報しないと約束するハーデンベルクと共に、行き詰まった３人は山荘から降りる。「失敗よ。誘拐したのは間違ってた。自滅したんじゃ世界は救えない」とユールはいい、ハーデンベルクを彼の屋敷に送った後、ヤンは「エデュケーターズ」の道具一式をゴミ置き場に捨てようとするが、ピーターはそれを止め、「友情を裏切った。終わりだ」というヤンに、「お前も寝返り組と同じか？　ユールのことはいい。おれを見損なうな。おれたちの理想は変わらない。何があっても」と、ユールを交えて「おれたち３人の絆は固い」「“理想こそすべて”よ」と結束を誓いあう。

翌朝、ヤンとピーターのアパートが警察隊に包囲されるが、室内はもぬけの殻。そこには“お前たちはきっと一生変わらない”という大きな貼り紙が一枚。前日、ソファでハーデンベルクが考え込んでいるシーンが映し出されていたように、彼は真剣に考えた挙句、３人との約束を破って警察に通報することを決心したのだ。かつての自分と何度も対話して、「すべて売って田舎に越」して「学生の頃に戻」ろうかと思ったが、それは現実的に不可能であることを覚ったのだ。すでに転向した途を突き進んできた彼の立場からすれば、どうしても３人の「理想」と衝突することは避けられなかったが故に、中途半端さを打ち捨てて、警察に通報せざるをえなかった。もちろん、“お前たちはきっと一生変わらない”というようにして。

２００５年7月２４日記